

From Local to Global
私と公衆衛生

ハンガリー医学教育調査団に同行する

日本尊厳死協会理事長 岩尾總一郎(元厚労省医政局長)

11月9日(水)、次期米国大統領選はドナルド・トランプ氏の勝利で日経平均が10000円近く下落したものの、終値はやや持ち直して1万6251・54円だった。円もドルに対し、一時1001円台まで急上昇したが、始値と同じ105円台に戻っていた。日付が変わる頃、私は羽田発フランクフルト行深夜便で機上の人となった。ハンガリーの医学教育に関する厚生労働省調査団が現地入りするので、先着し事前準備するためだ。

今まではウィーン経由便がブダペストまでの最短旅程時間だったが、オーストリア航空が日本から撤退したので、今回は全日本空輸を利用した。機内ではほとんど寝ているだけなのに、なぜ、日本の航空会社の運賃は他国便に比べ20万円以上も高いのか。フランクフルト空港には午前6時前に到着、同じターミナルビルでの乗り換えで、入国や手荷物検査もスムーズ、20分後にはブダペスト行き待合室に行くことができた。前回のロンドンのヒースロー経由とは大違い(16年8月1日号参照)だ。

空港待合室。CNNインターナショナルがトランプ氏の勝因とヒラリー・クリントン氏の敗因、思ったよりも暴落しなかった米国株価の今後の予測を識者に聞いていた。トランプ氏勝利で、金融市場は当初パニックに見舞われたが、その後は一転して世界的に株価が上がる「トランプ相場」が展開している。ドルも106円台になってきた。ユーロも2円ほど上昇した。今回の旅行費用が思いやられる。

日本人学生は「polite」

ブダペストには午前10時前に到着した。毎年2回はハンガリーにきているが、来るたびに公共シテムが洗練されてきている。空港での白タクによる客引きが目に見えて減った。タクシーは全車黄色に塗装され、タクシー乗り場に整然と待機しているのは新型ベンツやプリウスで、メーター料金通りに目的地に運んでくれる。高速道路が整備され、地下鉄も4号線が開通し、郊外住宅地まで新型の通勤列車が走っている。

ハンガリーのオルバン首相はプーチン大統領と仲良しだが、ロシア嫌いが多いハンガリー国民の間でも評価は高い。EU加盟国間の移民受け入れ可否を巡り、首相は10月2日に国民投票を実施した。反対票が98%近くを占めたものの、低投票率(43%)で50%にとどかなかつたため無効となった。だが、セルビアとの国境にフェンスをつくる法案を提出し、圧倒的多数の承認を得ている。

オルバン首相は3年前の11月に来日して安倍晋三総理との首脳会談に臨み、ハンガリー政府が日本人学生100人に対する新たな奨学金制度(大学授業料の免除と滞在費の補助)を創設することで合意した。うち10人が医学医療系の大学に割り当てられたが、日本人にとってハンガリーへの大学進学は音楽・芸術系と医学系以外人気がない。私が関与しているハンガリー医科大学事務局(HMU)が後押しをして、すでに40人を超える医学部留学生がこの恩恵に浴している。16、17年の医学部奨学金受給者は15人になった。

厚生省調査団は医事課試験免許室の加藤拓馬専門官、日本医学教育評価機構理事の奈良信雄先生(東京医科歯科大学特命教授、順天堂大学特任教授)、ほかに三菱UFJリサーチ&コンサルティングの2名で合計4人である。11日(金)と16日(水)はセンメルワイズ大で視察が行われた。双方の大学側とも、医学部長、副学部長、外国語教育の部門長が出席し、施設の視察では、部門の教授が丁寧に説明してくれた。

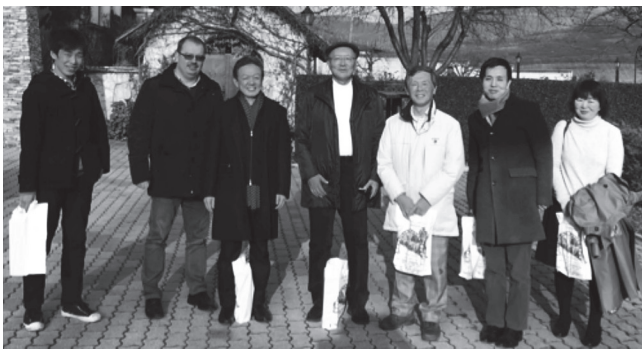
大学の歴史や沿革の説明に続き、留学生の話題になった。センメルワイズ大では16、17年上期に関しては1256人が医学部英語プログラムに在籍し、うち日本人留学生は80人でノルウェー307人、イストラエル143人に続きベスト3に入るとのこと。15、16年下期終了時点で進級者は1年生20人、2年生22人、3年生10人、4年生9人、5年生10人で、卒業生が6人だった。

最近では毎年20人程度が入学してくるが、上記の人数からわかるよ

うに、2年生から3年生に進級するのが難しい。日本人在籍者の成績表を見ると、5段階成績で1年生から3年生までが平均でfair(それぞれ3・13、2・51、2・99)、4年生から6年生までがgood(それぞれ3・62、4・10、3・75)と評価されている。試験は筆記と口頭で行われるが、日本人は「polite」であると表現していた。成績判定に対して坦白で、あまり文句を言わないということだろうか。

センメルワイズ大が留学生を絞る傾向があるのに対して、デブレツェン大では英語プログラムに力を入れている。16、17年度医学部英語コースの在籍者数は1563人で母国語コースの1306人より多い。デブレツェンはハンガリー第2の都市とはいえ、ブダペストの人口の10分の1に過ぎず、20万人だ。学園都市として国際化を打ち出さざるを得ないだろう。広大なキャンパス内に外国人用の学生寮が完備している。

両大学とも、日本人に限らないが2年次から3年次での病理学や



トカイ村ワインセラーにて、中央が筆者で、その右側が奈良先生、加藤専門官、左側にHMUの石倉代表、ヤナイ教授、両端が三菱UFJRCの両名

生理学、生化学など基礎医学系科目を落として多くの留年者が出ている。実際の授業風景を覗いた。200人近い学生に対しての講義、3班に分けてのセミナー。10班に分けてのグループ演習が半年にわたって続く。実験室は各科目に数部屋確保されているが、ハンガリー語クラス、ドイツ語クラスも同時に進むので、時間単位で細かく日程が定められている。

病理学のセミナーでは、顕微鏡の出番はない。教室の各人のパソコンに組織標本が映され、双方向で先生と対話している。神経生理

学演習ではランドルト環(視力検査で使われる「C」の切れ目が網膜でどのように判別されるか、レンズをさまざまに調節して計算していた。少人数グループ学習が必須なので、基礎医学系の授業には多くの教員が投入されていた。

HMUは大学のある各都市にスタディールームを設け、参考書を揃えて学生の予習復習や情報交換の場に行っている。週末も学生に開放しているの、遅くまで勉強する者もいる。ここで土曜日にセンメルワイズ大、日曜日にデブレツェン大学の留学生たちから話を聞くことができた。各学生から異口同音にペーパーテストでなく、口頭試問の難しさが語られた。

15日(火)、デブレツェン大国際教育部門長ヤナイ教授の案内でトカイ村を訪ね、ワインセラーを覗かせてもらった。地下10メートル、壁面をカビで覆われた横穴に、250リットル入りの木樽が整然と並んでいた。郷土料理の「グーラッシュ」を食べ、デザートワインとして有名なトカイワインを入手し、ブダペストに戻った。